

日本語唱法の研究

—鼻濁音 I—

河合 玲子

A Study of the Japanese Singing Method — about a Nasal Consonant I —

Reiko KAWAI

1 緒言

本学短期大学部保育学科では、保育者にとり必要不可欠な音楽の基礎知識と技術の習得のために、1年生の前期に保育士資格に必修である「保育表現技術（音楽1）」（以下「音楽1」）の授業を行い、後期には幼稚園教諭免許資格必修となる「歌に関する技術」を学ぶために、「保育表現技術（音楽2）」（以下「音楽2」）にて「弾き歌い」の個人指導と「声楽」のグループ授業による授業を行っている。「音楽1」では平成24年度よりピアノ個人指導と、少人数のグループによる楽典の学習指導という形で行っているが、「音楽2」では、1クラスを二つのグループに分け、45分交代で「弾き歌い」の個人指導の授業と、「声楽」のクラス授業を行っている。「弾き歌い」の授業では、「音楽1」で培ったピアノ技術と音楽的知識を基に、子どもの歌の伴奏技術の向上と、弾きながら歌うという技術について個人指導を行い、クラス授業の「声楽」では、子どもの歌の歌唱法を発声や発音、歌の背景なども考慮した基礎的な学習をグループ指導で行っている。

平成25年度の前期の「音楽1」の授業の中で、ピアノの演奏技術の向上のために童謡の移調奏の課題を行った。この課題による学習は、移調奏の技術の習得のためであるが、後期に学習する「音楽2」の「弾き歌い」の授業の導入としても有効であり、実施したものである。殆どの学生が、簡単な曲であってもピアノ演奏の方に比重が向けられてしまい、言葉といった歌唱部分にまで注意ができていないようであった。弾きながら歌うという行為が難しい、ということを実感した一歩といえる。また、意識しない時に発する歌詞は、学生本人が持っている言葉への感覚である。この感覚は、学生の普段の会話からも感じていたことであるが、その中に、発音の不明瞭さや、ガ行における鼻濁音の響きが聞かれないことも気になっていた。歌を歌う時の言葉には、はっきりとした意識が必要であり、特に子どもたちへ歌を歌う場合、言葉の明瞭さや正しい発声法が必要不可欠な技術となる。何故ならば、子どもたちは保育者の歌う声を聴いて真似をして歌を覚えるからであり、保育者は、子どもたちに正しく歌うことが要求される。その際に、美しい日本語を意識して歌うのか、それとも、そうでなく歌うのかでは、子どもたちの記憶として刷り込まれることを考慮すると、美しい日本語で歌唱すべきと考える。

近年、テレビ放送のアナウンサーでさえ、鼻濁音を使用せずにニュースを読むキャスターがいる。学生たちが日頃好んで聴いている歌手たちの歌は、詩情を意識しつつも、日本語の文章の美しさより、個性を強調したリズムや音形に捉われた曲であり、学生たちは、それらの歌手

の歌い方を真似し、それが良いと思ってカラオケなどで歌唱している。それらは本来あるべき日本語の美しさから外れているように感じる。このような歌が巷に氾濫していることも、美しい日本語に対しての意識が育ちにくい原因の一部と考えられ、子どもたちに歌を指導する立場の保育者は、この勘違いによる負の連鎖を断ち切る必要があると考える。

本研究では、本学科の学生たちが、どのくらい歌唱の際の言葉の扱いについて意識しているのか、美しい日本語で歌唱するために必要な知識のひとつである「鼻濁音」について調査し、述べることとする。

2 鼻濁音について

日本は、北は北海道から南は沖縄まで、それぞれの地方で独特な方言が使われている。それらの言葉はそれぞれの地方で特有の進化をしており、その地方の者でないと理解できなかったりする。異なった地方の者同士の意思疎通の不便さを無くす目的で、共通語として東京の山の手ことばを基準とした標準語が、明治期に設定された。この標準語という共通語は、ラジオ放送や蓄音機といった録音技術の発達と共に全国に流布され、その後、共通語として認識された言語となったのである。ガ行の取り扱いについては、当然、この東京の山の手ことばを基準に設定されており、その使用法は、金田一春彦氏監修による『新明解日本語アクセント辞典 第2版CD付き』(2014年第1刷発行 三省堂)のガ行鼻音(ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ)についての解説の中で『1. 語頭のガ行は鼻音化しないが、助詞の「が」「ぐらい」「ごとし」などは鼻音化する。2. 語中・語尾のガ行は原則鼻音化する。但し、擬声・擬態語、その他同音の繰り返しは鼻音化しない。3. 数詞の五は鼻音化しないが、数詞として意義の薄れた熟語は鼻音化する。4. 「お」などの軽い接頭語の次にガ行が来る場合鼻音化しない。5. ingなどの原音が入っていない外来語は鼻音化しない。』¹⁾と記載されている。ガ行のその発音法は、ガ・ギ・グ・ゲ・ゴを発音する際に、其々の語彙の前に軽く「ン」を言いながら [ŋga・ŋgi・ŋgu・ŋge・ŋgo] のように発音し、発音記号はカ°キ°ク°ケ°コ°と標記される。ガ行の概念には、必然的に、この鼻濁音を正しく使うことが、美しい日本語といえるのである。

ガ行の鼻音化は東京を中心とした発音であるが、ガ行鼻濁音を発音しない地方として、関東地方の千葉県の安房地方や栃木県、新潟県、中部地方の愛知県、近畿地方の三重県志摩地方や兵庫県、四国地方の愛媛県、中国地方全域、九州地方全域、沖縄地方が国立国語研究所の刊行した『日本言語地図 第1集』(1966年初版・1981年縮刷版1. カガミ〈鏡〉の-G-の音、2. カゲ〈陰〉の-G-の音)の調査結果で-G-を発音する際に鼻音化されていないと、図から読み取れる。

日本語を話す上でなぜ鼻濁音を使用すべきなのかについては、言葉には言霊が宿るという思想が日本にはあるからと考える。古来より日本人は豊かなる四季の中で、「ケ」と「ハレ」を使い分けて生活してきた。この「普段の～」と「特別な～」を区別するという作業は、我々にとって特別のことではなく、普通に行っている。豊かな自然の中で、八百万の神々の存在を意識して生活を営んできたのである。そこに、普段が自分たちであるならば、神は特別な存在であり、生活の中に両者が存在しているわけである。これら日本人の感性には、自然に対し畏敬の念を抱いているからと考えられるが、自然に対する語彙も豊富であり、例を挙げるとすれば、雨に関する言葉に、霧雨・雨滴・甘雨・細雨・慈雨・秋雨・白雨・五月雨といった雨の変

化を巧みな言葉で表現する語がある。音に関しても同じことがいえ、こおろぎ、キリギリス、ウマオイ、鈴虫、マツ虫、クツワムシといった虫の鳴き声の少しの違いを識別し、それらから秋の風情を感じるといった鋭い感覚を持っている。日本語の音に関しても、当然ながら濁音と清音の響きの違いをはっきりと区別しているといえる。言葉の響きから、濁音は穢い音、清音はきれいな音と感じる感覚であり、古来より硬く感じられるガ行を柔らかく表現するために、鼻音化が行われてきたと推測できる。

日本語の歌を歌唱する際、日本語の発音の仕組み上、一シラブルにつき一音となる。「でたでた月が…」ではじまる文部省唱歌『月』を例に挙げてみよう。これを英語で表現するならば、The moon has risen.となり、The moon, has, risenの三シラブルから構成されており、音符で表すと三音となる。しかも、最初のThe moonという言葉で直ぐに月と理解できる。しかし、これを日本語で言う場合、「月が出た」つまり「つ・き・が・で・た」の五シラブルで五音となる。また、日本語の場合、「つ」と聞いただけでは月を連想することは不可能である。「つき」と聞いても「付き」なのか、「尽き」なのか、「突き」「着き」「就き」なのか、その音からだけで判断するのは困難である。「月」とわかったとしても、それに続く言葉の「が」が問題である。

『月』の歌詞では、「で・た・で・た・つ・き・が」とある。「でたでたつきが」を聞いただけでは、「出た、出た、ツキ蛾」ツキ蛾という虫が出てきたとも解釈できるし、「出たで、たつきが」たつきという名の者が出たよと解釈することも可能である。文章を一連として読む場合は、その前後から意味を理解することが出来たとしても、歌謡の場合、言葉の一音を長く延ばす場合がある他、語彙に高低差の音程を付けることで、前後の言葉の意味から離れ、反射的に言葉の響きの音から語意を勘違いしてしまうことがある。日本語のアクセントは高低差により意味が変わるので、その結果、何とも意味不明の歌となってしまうのである。故に、歌を歌うときは、一語一語意味を考え、それが正しく伝わるのかをも考えて歌わなければならない。この『月』においても、「が」を鼻音化することで助詞とわかり、その前に発せられた名詞「月」をより際立たせることができる。「が」の発音を柔らかくすることで文全体の言葉も柔らかくなり、月の印象も変わってくるのではないかと思う。

母音が多い言語というのは美しい言語であるといわれるが、日本語もイタリア語やハワイ語同様、世界的にみても母音の多い言語である。レガート唱法が母音でのみ作り出せることを前提にすると、この母音が多いということは、日本語が歌唱に大変向いているといえ、この特性を生かすうえでも、保育者は正しい発声法と発音で、子どもたちに美しく歌う必要があるといえる。美しい日本語の一つに鼻濁音があるが、保育者が保育の中でガ行の鼻濁音を使うことで、音に敏感な子どもたちは、鼻濁音を自然に体得することができるという好影響が考えられる。即ち、そこに美しい日本語の習得の第一歩を歩み始めるわけであり、日本語や日本の歌を美しく感じ取る感性を養えるのではないかと考える。本研究ではこの鼻濁音にスポットを当てて学生の実情を調査し、今後の授業に反映させていくことを目的とする。

3 アンケート結果

「音楽2」における授業受講者を対象に、「鼻濁音」についてどのくらい認識しているのか調査するために、平成25年9月24日授業開始時と、平成26年1月14日の授業終了時にアンケートを実施した。授業開始時のアンケート（以下、アンケート1）の回答者は167人、この数字は

平成25年度保育学科2年生全員である。終了時のアンケート（以下、アンケート2）の回答者は159人、この数字はアンケート2実施日の授業出席者である。それぞれの結果を1)、2)としてまとめた。

1) アンケート1

設問Ⅰと設問Ⅱでは、鼻濁音についての概念と使用についてアンケート1(図1)調査を行った。回答者167人中、設問Ⅰの鼻濁音という言葉に対して①知っていると言った学生は35人(全体の21%、以下カッコ内の%表示「全体の」を省略)、②名前は知っていると言った学生は45人(26.9%)、③知らないと言った学生は87人(52.1%)であった。設問Ⅰの質問で①知っていると言え、設問Ⅱのその使い方について①できると回答した学生は4人(2.4%)、②気を付ければできると答えた学生は22人(13.8%)、③できないと答えた学生は9人(5.4%)であった。設問Ⅰで②名前は知っていると言った学生45人の内、設問Ⅱで①できると答えた学生は0人、②気を付ければできると回答した学生は10人(6%)、③できないと回答した学生は35人(21%)であった。設問Ⅰで③知らないと言った学生は、設問Ⅱの質問に対して87人全員が③できないと答えている。結果として鼻濁音を何らかの形でできる学生が36人(21.6%)であり、できない学生が131人(78.4%)であった。

「保育表現技術(音楽2)日本語についてのアンケート1	
実施日 平成25年9月24日	
Ⅰ～Ⅱについて自分に当てはまる質問に○印を付けて下さい。	
Ⅰ. 鼻濁音という言葉について…	
① () 知っている	② () 名前は知っている
③ () 知らない	
Ⅱ. その使い方について…	
① () できる	② () 気を付ければできる
③ () できない	
Ⅲ. 次の下線部の言葉について、鼻濁音で発音すると思うものを○で囲んで下さい。	
1. が <u>っ</u> こう	6. とう <u>げ</u>
2. ちゅうが <u>っ</u> こう	7. ゆう <u>ぐ</u> れ
3. とびら <u>が</u> ひらく	8. くもり <u>が</u> ラス
4. <u>ガ</u> タ <u>ガ</u> タするつくえ	9. お <u>げ</u> んきですか
5. じゅう <u>ご</u> さい	10. もりの <u>き</u> ぎ
Ⅳ. あなたの出身地を教えてください。(県 市)	
Ⅴ. あなたは、祖父母と同居したことがありますか。 はい () いいえ ()	

図-1 アンケート1

設問Ⅲは、学生たちが「鼻濁音」というその言葉から各自が感覚的に判断し、実際に使用して発音するかどうかについて調査したものである。問1～問10まで、問1は語頭にガ行が来る場合、問2は語中でガ行が来る場合、問3は助詞「が」の場合、問4は擬音語(オノマトペ²⁾)などでガ行を使用した場合、問5は数字の場合、問6、問7は名詞の語中の場合、問8は外来語の場合、問9は「お」などの軽い接頭語の後のガ行の場合、問10は重ねた言葉がガ行になっ

た場合の言葉を、鼻濁音使用とそうでない場合とが、それぞれ5問題となるように実施した。設問Ⅰで①と答えた35名の学生、②と答えた45名の学生、③と答えた87名の学生が、問1から問10の言葉に対してどのように選択したかを表1にまとめた。また、その相対数を表2にまとめた。

表1 アンケート1 学生の解答の結果

(単位：人数)

項目	人数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10
a 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで①と答えた学生	4	1	2	3	0	0	1	1	0	1	3
b 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで②と答えた学生	22	11	9	13	1	4	7	7	4	3	4
c 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで③と答えた学生	9	6	6	7	1	3	3	2	5	2	2
A 知っていると答えた学生の小計A(a+b+c)	35	18	17	23	2	7	11	10	9	6	9
d 設問Ⅰで②と答え、設問Ⅱで①と答えた学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
e 設問Ⅰで②と答え、設問Ⅱで②と答えた学生	10	4	4	6	2	4	1	3	2	2	4
f 設問Ⅰで②と答え、設問Ⅱで③と答えた学生	35	10	15	5	2	6	8	10	6	8	11
B 名前は知っているか答えた学生の小計B(d+e+f)	45	14	19	11	4	10	9	13	8	10	15
g 設問Ⅰで③と答え、設問Ⅱで①と答えた学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
h 設問Ⅰで③と答え、設問Ⅱで②と答えた学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
i 設問Ⅰで③と答え、設問Ⅱで③と答えた学生	87	8	23	11	10	20	24	20	18	17	13
C 知らないか答えた学生の小計C(g+h+i)	87	8	23	11	10	20	24	20	18	17	13
回答した学生の総計(A+B+C)	167	40	59	45	16	37	44	43	35	33	37

表2 アンケート1 学生の解答の全体に対する割合

(単位：パーセント)

項目	人数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10
a 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで①と答えた学生の割合	2.4	0.6	1.2	1.8	0	0	0.6	0.6	0	0.6	1.8
b 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで②と答えた学生の割合	13.2	6.6	5.4	7.8	0.6	2.4	4.2	4.2	2.4	1.8	2.4
c 設問Ⅰで①と答え、設問Ⅱで③と答えた学生の割合	5.4	3.6	3.6	4.2	0.6	1.8	1.8	1.2	3	1.2	1.2
D 知っているか答えた学生のA(a+b+c)の割合	21	10.8	10.2	13.8	1.2	4.2	6.6	6	5.4	3.6	5.4
d 設問Ⅰで②と答え、設問Ⅱで①と答えた学生の割合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
e 設問Ⅰで②と答え、設問Ⅱで②と答えた学生の割合	6	2.4	2.4	3.6	1.2	2.4	0.6	1.8	1.2	1.2	2.4
f 設問Ⅰで②と答え、設問Ⅱで③と答えた学生割合	21	6	9	3	1.2	3.6	4.8	6	3.6	4.8	6.6
E 名前は知っているか答えた学生のB(d+e+f)の割合	27	8.4	11.4	6.6	2.4	6	5.4	7.8	4.8	6	9
g 設問Ⅰで③と答え、設問Ⅱで①と答えた学生の割合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
h 設問Ⅰで③と答え、設問Ⅱで②と答えた学生の割合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
i 設問Ⅰで③と答え、設問Ⅱで③と答えた学生の割合	52.0	4.8	13.8	6.6	6	12	14.4	12	10.8	10.2	7.8
F 知らないか答えた学生のC(g+h+i)の割合	52.0	4.8	13.8	6.6	6	12	14.4	12	10.8	10.2	7.8
回答した学生の総計(A+B+C)の割合	100	24	35.4	27	9.6	22.2	26.4	25.8	21	19.8	22.2

設問Ⅳは、学生の出身地により鼻濁音についての認識に差があるかを調査したものである。国立国語研究所『日本語地図 第1集』(1966年初版・1981年縮刷版1. カガミ〈鏡〉の-G-の音、2. カゲ〈陰〉の-G-の音)の調査結果では、鼻音化しない地方として愛知県や三重県といった所が含まれているが、本学に在籍する学生の多くがこれらの地域から通学しており、鼻濁音についての認識が事実であるのかを調査した。対象となる学生の出身地は、愛知県120人、岐阜県9人、長野県7人、福井県1人、富山県1人、三重県21人、滋賀県1人、奈良県1人、広島県1人、長崎県1人、宮崎県1人、埼玉県1人、神奈川県1人、アメリカ合衆国1人であった。

一般的な地方区分による結果では、中部地方³⁾の学生が138人(全体の82.6%)、近畿地方⁴⁾の学生が23人(13.8%)、中国地方の学生が1人(0.6%)、長崎県や宮崎県といった九州地方出身の学生が2人(1.2%)、埼玉県や神奈川県、関東出身の学生が2人(1.2%)、国外の学生が1人(0.6%)であった。

中部地方の出身者の設問Ⅰの回答は、①知っていると答えた学生が29人(17.4%)、その内、設問Ⅱで①できると答えた学生が4人(1.8%)、②気を付ければできると答えた学生が19人(11.4%)、③できないと答えた学生が6人(3.6%)であった。設問Ⅰで②名前は知っているとして答えた学生が36人(21.3%)、その内、設問Ⅱで①できると答えた学生が0人、②気を付ければできると答えた学生が7人(4.2%)、③できないと答えた学生が29人(17.4%)であった。設問Ⅰで③知らないとして答えた学生が73人(43.7%)、その全員が設問Ⅱで③できないと答えた。近畿地方の出身者の設問Ⅰの回答は、①知っているとして答えた学生は4人(2.4%)、その内、設問Ⅱで①できると答えた学生が0人、②気を付ければできると答えた学生が2人(1.2%)、③できないと答えた学生が2人(1.2%)であった。設問Ⅰで②名前は知っているとして答えた学生が8人(4.8%)、その内、設問Ⅱで①できると答えた学生が0人、②気を付ければできると答えた学生が3人(1.8%)、③できないと答えた学生が5人(3%)であった。設問Ⅰで③知らないとして答えた学生が11人(6.6%)、その全員が設問Ⅱで③できないと答えた。九州地方の出身者2人(1.2%)の設問Ⅰの回答は、①知っているとして答えた学生が1人(0.6%)、③知らないとして答えた学生が1人(0.6%)であった。そのどちらともが設問Ⅱで③できないと答えた(1.2%)。関東地方の出身者2人(1.2%)の設問Ⅰの回答は、②名前は知っているとして答えた学生が1人(0.6%)、③知らないとして答えた学生が1人(0.6%)、設問Ⅱでは②気を付ければできると答えた学生が1人(0.6%)、③できないと答えた学生が1人(0.6%)であった。中国地方出身の学生1人(0.6%)の回答は設問Ⅰで③知らない(0.6%)と答え、設問Ⅱでも③できないと答えた。国外の学生1人(0.6%)の出身地はアメリカであるが、この学生の設問Ⅰの回答は②名前は知っている(0.6%)と答え、設問Ⅱで③できないと答えた。鼻濁音を何らかの形でできる学生と、できない学生を地方別の結果で表すと、中部地方では前者が30人(18%)、後者が108人(64.7%)であった。近畿地方では前者が5人(3%)、後者が18人(10.8%)、九州地方では前者が1人(0.6%)、後者が1人(0.6%)、関東地方では前者が0人、後者が2人(1.2%)、中国地方では後者が1人(0.6%)、その他、後者が1人(0.6%)であった。

鼻音化しない地方として名の挙がった地方に該当する学生は145名(86.9%)であった。設問Ⅰで①知っているとして答えた学生が29人(17.4%)、その内、設問Ⅱで①できると答えた学生が3人(1.8%)、②気を付ければできると答えた学生が18人(10.8%)、③できないと答えた学生が8人(4.8%)であった。設問Ⅰで②名前は知っているとして答えた学生は40人(24%)であり、その内、設問Ⅱで①できると答えた学生は0人、②気を付ければできると答えた学生は9人(5.4%)、③できないと答えた学生は31人(18.6%)であった。設問Ⅰで③知らないとして答えた学生が76人(45.5%)であるが、これらの学生は設問Ⅱでも③できないと答えている。

設問Ⅴは、鼻濁音という言葉は知らなくても、祖父母と言った年配者との生活習慣から、耳からの学習により自然に使用することが出来た可能性もあるということから調査を行った。設問Ⅴにおいて無回答1人(0.6%)の学生が1人いたが、この学生の設問Ⅰでの回答は①知っているであり、設問Ⅱでは②気を付ければできると回答している。アンケート回答176人中、祖父母と一緒に暮らしたことのある学生は74人おり、学年全体の44.3%であった。あると回答した学生の内訳を調べると、設問Ⅰで鼻濁音を知っていると回答し、設問Ⅱの設問で①できる

と答えた学生は3人(1.8%)、設問Ⅱで②気を付ければできると答えた学生は12人(7.1%)、問Ⅱで③できないと答えた学生は6人(3.6%)であった。設問Ⅰで名前は知っていると回答し、②気を付ければできると答えた学生は4人(2.4%)、③できないと答えた学生は12人(7.1%)であった。問Ⅰで③できないと答え、設問Ⅱでも③できないと答えた学生は37人(21.9%)であった。

国立国語研究所『日本言語地図』(1966年初版・1981年縮刷版)の調査結果で鼻濁音を使用しないという結果であった愛知県、三重県、中国地方、九州地方の出身者についても調査結果をまとめた。これら地域の出身の学生に対し、祖父母との同居経験の結果は68人(40.7%)であった。設問Ⅰで①知っていると答えた学生では14人(8.4%)であり、それらの学生の内、設問Ⅱで①できると答えた学生は2人(1.2%)、②気を付ければできると答えた学生は7人(4.2%)、③できないと答えた学生は5人(3%)であった。また、設問Ⅰで②名前は知っていると答えた学生は23人(13.8%)であった。それらの学生の内、設問Ⅱで①できると答えた学生は0人、②気を付ければできると答えた学生は3人(1.8%)であり、③できないと答えた学生は20人(12%)であった。設問Ⅰで③知らないと答えた学生は31人(18.6%)であった。それらの学生全員は設問Ⅱでも③できないと答えている。

2) アンケート2

「音楽2」の授業終了時に、授業出席者159名に対し、鼻濁音についての学習成果を確認するためのアンケート2(図2)を行った。設問Ⅰは、アンケート1の設問Ⅲと同じ問にし、授業を受けてその後どのように変化したかを調査した。設問Ⅱは鼻濁音についての認知度を、設問Ⅲではその使用を調査した。設問Ⅳではその使用時の状況を調査した。

設問Ⅰの結果については表3と表4にその結果を述べる。

設問Ⅱは、鼻濁音に対する認知度を調査する目的であったが、その結果は、①前から知っていたと答えた学生が51人(32.1%)、②名前は知っていたと答えた学生が67人(42.1%)、③知らなかったと答えた学生が38人(23.9%)、④今も知らないと答えた学生が3人(1.9%)であった。

設問Ⅲは、鼻濁音の使い方について習熟度を調査したが、①できると答えた学生は9人(5.7%)、②気を付ければできると答えた学生は110人(69.2%)、③できないと答えた学生は40人(25.2%)であった。設問Ⅱで①前から知っていたと答え、設問Ⅲで①できると答えた学生は8人(5%)、②気を付ければできると答えた学生は40人(25.2%)、③できないと答えた学生は3人であった。設問Ⅱで名前は知っていたと答え、設問Ⅲで①できると答えた学生は1人(0.6%)、②気を付ければできると答えた学生は50人(31.4%)、③できないと答えた学生は16人(10.1%)であった。設問Ⅱで知らなかったと答え、設問Ⅲで①できると答えた学生は0人、②気を付ければできると答えた学生は20人(12.6%)、③できないと答えた学生は18人(11.3%)であった。設問Ⅱで④今も知らないと答えた3人(1.9%)は設問Ⅲでも③できないと答えている。

設問Ⅳは、学生が鼻濁音を使う場合にどのような時に気を付けているのかを調査した。①普段の会話から気を付けている、②人前で話をする時に気を付けている、③朗読をする時に気を付けている、④歌唱する時に気を付けている、の4項目に当てはまるものがあれば選択するという調査であり、複数回答も可とした。

設問Ⅳに対し、①普段の会話から気を付けていると答えた学生は3人(1.9%)、②人前で話をする時に気を付けていると答えた学生は2人(1.3%)、③朗読をする時に気を付けていると答えた学生は15人(9.4%)、④歌唱する時に気を付けていると答えた学生は144人(90.6%)で

「保育表現技術 (音楽2)」日本語についてのアンケート2

実施日 平成26年1月14日

I. 次の下線部の言葉について、鼻濁音で発音すると思うものを○で囲んで下さい。

- | | |
|-------------------------------|---------------------|
| 1. が <u>っ</u> こう | 6. とう <u>げ</u> |
| 2. ちゅう <u>が</u> っこう | 7. ゆう <u>ぐ</u> れ |
| 3. とびら <u>が</u> ひらく | 8. くもり <u>が</u> ラス |
| 4. <u>ガ</u> タ <u>ガ</u> タするつくえ | 9. お <u>げ</u> んきですか |
| 5. じゅう <u>ご</u> さい | 10. もりの <u>き</u> ぎ |

II～IVについて自分に当てはまる質問に○印を付けて下さい。

II. 鼻濁音という言葉について…

- ① () 前から知っていた ② () 名前は知っていた
③ () 知らなかった ④ () 今も知らない

III. その使い方について…

- ① () できる ② () 気を付ければできる ③ () できない

IV. あなたが鼻濁音を使う場合どのような時に気を付けていますか？ (複数回答可)

- ① () 普段の会話から気を付けている。
② () 人前で話をする時に気を付けている。
③ () 朗読をする時に気を付けている。
④ () 歌唱する時に気を付けている。

図2 アンケート2

あり、無回答の学生が9人(5.7%)であった。

設問IVで①普段の会話から気を付けていると答えた学生は3人であったが、これらの学生はその内、2人の学生が設問IIIで①できると答えており、これらの学生は設問IVの他の項目を選択していなかった。残りの1人は設問IIIで②気を付ければできると答え、設問IVの項目では①から④まで全ての項目を選択していた。設問IVで②人前で話をする時に気を付けていると答えた学生は2人であったが、単独で②を選択していた学生は0人であった。この項目を選択していた学生は、設問IVで全ての項目を選択した学生と、設問IVで①以外の3項目を選択した学生であり、これらの学生は設問IIIで②気を付ければできると答えている。設問IVで③と答えた学生は15人(9.4%)であり、その内、単独で選択している学生は3人(1.9%)であった。これらの学生は設問IIIで1人(0.6%)が②気を付ければできると答え、2人(1.3%)が③できないと答えている。それ以外の学生12人(7.5%)は、全員が④を併記して選択していた。内訳は、3項目以上を選択した2人を除き、設問IIIで①と答えた学生が2人(1.3%)、②と答えた学生が6人(3.8%)、③と答えた学生が1人(0.6%)であった。設問IVで④歌唱する時に気を付けていると答えた学生は144人(90.6%)であったが、設問IIIで①と答えた学生が7人(4.4%)、②と答えた学生が106人(66.7%)、③と答えた学生が31人(19.5%)であった。無回答の学生は全体で9人(5.7%)であったが、それらの学生は設問IIIで②と答えた2人(1.3%)と③と答えた7人(44.4%)であった。

表3 アンケート2 学生の回答数

(単位：人数)

項目	人数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10
a 設問Ⅱで①と答え、設問Ⅲで①と答えた学生	8	1	5	7	2	2	5	2	2	3	4
b 設問Ⅱで①と答え、設問Ⅲで②と答えた学生	40	11	27	28	8	12	17	13	18	13	17
c 設問Ⅱで①と答え、設問Ⅲで③と答えた学生	3	1	3	1	0	0	2	1	1	2	1
A 小計A(a+b+c)	51	13	35	36	10	14	24	16	21	18	22
d 設問Ⅱで②と答え、設問Ⅲで①と答えた学生	1	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1
e 設問Ⅱで②と答え、設問Ⅲで②と答えた学生	50	16	30	41	9	18	16	21	16	20	23
f 設問Ⅱで②と答え、設問Ⅲで③と答えた学生	16	4	7	13	1	5	4	3	5	4	6
B 小計B(d+e+f)	67	20	37	55	11	23	20	24	22	24	30
g 設問Ⅱで③と答え、設問Ⅲで①と答えた学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
h 設問Ⅱで③と答え、設問Ⅲで②と答えた学生	20	4	10	17	3	6	4	8	10	6	5
i 設問Ⅱで③と答え、設問Ⅲで③と答えた学生	18	12	11	14	9	6	3	5	6	5	8
C 小計C(g+h+i)	38	16	21	31	12	12	7	13	16	11	13
j 設問Ⅱで④と答え、設問Ⅲで①と答えた学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
k 設問Ⅱで④と答え、設問Ⅲで②と答えた学生	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
l 設問Ⅱで④と答え、設問Ⅲで③と答えた学生	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
D 小計C(j+k+l)	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
総計(A+B+C+D)	159	49	93	125	33	49	51	53	59	53	65

表4 アンケート2 学生の回答の割合

(単位：パーセント)

項目	人数	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10
a 設問Ⅱで①と答え、設問Ⅲで①と答えた学生の割合	5	0.6	3.1	4.4	1.3	1.3	3.1	1.3	1.3	1.9	2.5
b 設問Ⅱで①と答え、設問Ⅲで②と答えた学生の割合	25.2	6.9	17	17.6	5	7.5	10.7	8.2	11.3	8.2	10.7
c 設問Ⅱで①と答え、設問Ⅲで③と答えた学生の割合	1.9	0.6	1.9	0.6	0	0	1.3	0.6	0.6	1.3	0.6
E 知っていたと答えた学生A(a+b+c)の合計	32.1	8.1	22.6	23	6.3	8.8	15.1	10.1	13.2	11.4	13.8
d 設問Ⅱで②と答え、設問Ⅲで①と答えた学生の割合	0.6	0	0	0.6	0.6	0	0	0	0.6	0	0.6
e 設問Ⅱで②と答え、設問Ⅲで②と答えた学生の割合	31.4	10.1	18.9	25.8	5.7	11.3	10.1	13.2	10.1	12.6	14.5
f 設問Ⅱで②と答え、設問Ⅲで③と答えた学生の割合	10.1	2.5	4.4	8.2	0.6	3.1	2.5	1.9	3.1	2.5	3.8
F 名前は知っていたと答えた学生B(d+e+f)の合計	42.1	12.6	23.3	34.6	6.9	14.4	12.6	15.1	13.8	15.1	18.9
g 設問Ⅱで③と答え、設問Ⅲで①と答えた学生の割合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
h 設問Ⅱで③と答え、設問Ⅲで②と答えた学生の割合	12.6	2.5	6.3	10.7	1.9	3.8	2.5	5	6.3	3.8	3.1
i 設問Ⅱで③と答え、設問Ⅲで③と答えた学生の割合	11.3	7.5	6.9	8.8	5.7	3.8	1.9	3.1	3.8	3.1	5
G 知らなかったと答えた学生C(g+h+i)の合計	23.9	10	13.2	19.5	7.6	7.6	4.4	8.1	10.1	6.9	8.1
j 設問Ⅱで④と答え、設問Ⅲで①と答えた学生の割合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
k 設問Ⅱで④と答え、設問Ⅲで②と答えた学生の割合	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
l 設問Ⅱで④と答え、設問Ⅲで③と答えた学生の割合	1.9	0	0	1.9	0	0	0	0	0	0	0
H 知らないで答えた学生D(j+k+l)の合計の割合	1.9	0	0	1.9	0	0	0	0	0	0	0
回答をした学生総計(A+B+C+D)の合計の割合	100	30.7	58.5	79	33	49	51	53	59	53	65

4 考察

アンケート1の設問Ⅰの結果より、①知っている②名前は知っているを含めた鼻濁音の言葉の認識度は47.9%と約半数弱であり、③知らないと答えた52.1%と比較すると、おおよそ半々といえる。このことは予想していた数値より多かった。しかし、鼻濁音が使えるかという設問

Ⅱに対しては、全体で4人しかできると答えていない。これは、鼻濁音について、教育機関で学ぶという機会が、文部科学省の指導要領にも記載されていないことにもよるからであるが、鼻濁音が必要ないかと言えば決してそうではないわけで、美しい日本語の伝承を考えた際に、危惧すべきことである。故に、保育学科の学生が「音楽2」で鼻濁音を学ぶということは、美しい日本語の伝承として大変意義深いといえるのではなからうか。アンケート1において、設問Ⅰで①知っている と 答え、設問Ⅱにおいて②気をつけられればできると答えている学生が22人であった。これらの学生は、鼻濁音とはどのようにして発音するのかという方法を知っていると考えられる。設問Ⅰで①知っている と 答え、設問Ⅱにおいて③できない と 答えた学生が9人いるが、例えば、イタリア語のRの発音であるが、イタリアの子どもたちは、幼い頃よりイタリア語のRの発音を耳にしている。しかし、日本人がこれを行おうとすると、日本語には舌を震わす巻舌が発音にない。その結果、身体機能的にできる者とそうでない者といえる。これらの学生は鼻濁音を耳にしていなかったために身体的機能の理由からできないのではないかと考えられる。設問Ⅰで②名前は知っている と 答え、設問Ⅱでは②気をつけられればできると答えた学生が10人であった。これらの学生は、漢字の語意より判断し、身体的機能上できると答えたと考えられる。設問Ⅰで②名前は知っている と 答え、設問Ⅱで③できない と 答えた学生35人と、設問Ⅰで③知らない と 答えた学生87人について、技法を教わる機会が無かったという理由によりできないのか、また、身体機能的にできないのかを判断することはできない。また、これらの学生は、名前は知らなくても実際に鼻濁音を使用している場合もあり得るし、逆に、鼻濁音を使えたと回答した学生についても、実際にどのような時に使用しているのか、その使用に誤りがないのかという懸念もないとはいえない。

設問Ⅲは、実際に具体的な使用例の問の課題を提示したものである。問1から問10までが行を含む語で提示されているが、この中で鼻濁音を使用するものとして、問2の<が [nga]>、問3の<が [nga]>、問6の<げ [nge]>、問7の<ぐ [ngu]>、問10の<ぎ [ngi]>の5句を出題した。それぞれの出題問題についての結果を述べる。

問2に対して表1と表2の結果からは59人が鼻音化すると解答し、これは全体の35.4%にあたる。設問Ⅰで①知っている と 答えた学生35人中鼻濁音と解答した学生は17人(10.2%)、②名前は知っている と 答えた学生45人中鼻濁音として解答した学生は19人(11.4%)、③知らない と 答えた学生87人中鼻濁音として解答した学生は23人(13.8%)であり、①と答えた学生の内、約半数、②と答えた学生の内4割強、③と答えた3割弱が鼻濁音と答えている。各項で認識の割合は減少傾向にあるが、逆に考えると、①と答えた学生の約半数しか鼻濁音と認識していないことと、②で4割強、③においては3割弱の学生が鼻濁音と認識していたということは驚きであり、問3に関して、①と答えた学生の内、7割弱が鼻濁音と解答しており、この問題は認識が比較的高いといえる。逆に②と答えた学生については2割強、③と答えた学生については約1割であり、認識が低いといえる。問6、問7、問10に関して、①と答えた学生については約2～3割、②と答えた学生は2割強、③と答えた学生は1～3割弱程度であり、この問題に関しての認識が全体的に低いといえる。その中で、本学の留学生在が②名前は知っている と 答えているが、これは本学入学前の語学学校の講義で知ったと言っていた。

鼻濁音を使用しない語として、問1<が [ga]>、問4<ガ [ga]>、問5<ご [go]>、問8<が [ga]>、問9<げ [ge]>の5題を提示したが、問1に対しては語頭に鼻濁音を使用するかという問題である。これについて、①と②と答えた学生の約半数近くが鼻音化すると答えている。語頭に<ン [n]>を入れて発音する語に、東北地方の方言などがある。返答

をする際の「んだ」もその例であるが、アンケート実施対象者に東北地方出身者はいなかった。それ故、方言の可能性はないといえる。③と答えた学生では1割弱という結果から、別件で考えられることとしては、ガ行が語頭に来た場合、①や②と答えた学生はくが [ga] >と発音するために口の中で発音の準備をする際に、力が入って<ン [n] >をつけてしまうのではないかと考えられる。問4、問5、問8、問9について、どの学生も約8割が鼻音化しないと答えており、この結果は正しい判断といえる。言い換えれば、学生の多くが普段から鼻音化せずガ行を発音していると判断できる。

アンケート1により、<鼻濁音>という名前は知っていても、その使い方については殆どの学生が実態を知らないということがわかった。また、設問Ⅳの地方別による鼻濁音の使用であるが、中部三県出身の学生が多くを占め、それ以外の地方出身者の学生の数が少ない理由から、比較するには不向きであり、判断するのが難しいといえる。それでも、何かが分かるかもしれないので、鼻音化しない地方として名の挙がった愛知県、三重県、広島県、宮崎県、長崎県の学生の145人と、その他の地域を含めた全体とを比較した。

設問Ⅰで①知っていると言った学生が29人(20%)、②名前は知っていると言った学生が40人(13.8%)、③知らないと言った学生が76人(52.4%)あり、調査した学生全体159人の割合が①知っていると言った21%、②名前は知っていると言った26.9%、③知らないと言った52.1%と比較しても、①と③では殆ど差が無いといってよいと考える。②に関しては若干の差が出たといえる。上記の地方出身の学生の設問Ⅱでは、①できると答えた学生が3人(2%)、②気を付ければできると答えた学生が35人(24.1%)、③できないと言った学生が107人(73.8%)であった。学生全体の回答の割合が①と答えた2.4%、②と答えた19.1%、③と答えた78.4%と比較すると、①で若干の減少がみられるが、②で若干の増加、③での減少の様子から全体と比較する鼻濁音の認識度が勝っているといえる。

設問Ⅴの祖父母との同居経験の有無の調査であるが、167人に調査をした結果は74人(44.3%)があると答えている。その結果は、設問Ⅱで①や②と答えた鼻濁音を認識している学生が18人(10.8%)、そうでない学生が56人(33.5%)であり、その比は、おおよそ1:3であった。上記の鼻濁化しない地方として挙がった地方の学生は74人中68人であり、それに該当する学生の比を同じように比べると、①や②と答えた学生が12人(7.2%)、そうでない学生が56人(33.5%)であり、その比は、おおよそ1:5であった。このことから、この地方では鼻音化する学生の割合が低いことが分かった。これらの地方では、祖父母自身も鼻音化しないということが、他の地域より若干ではあるが多いという結果がでたといえ、祖父母との同居から鼻濁音の影響を受けているとはいえないことがわかった。

アンケート2の鼻濁音の使用に関する具体的な例についての問題が、アンケート1では設問Ⅲであったものを最初の項の設問Ⅰにした理由は、「音楽2」の授業を受けてどのような時に鼻濁音を行うのか、先入観なしで感覚的に解答できるのではないかと図ったからである。その結果、鼻濁音に対する過去の認識では、設問Ⅱの①前から知っていた、②名前は知っていたと回答した学生が118人と増え、③知らなかった、④今も知らないと回答した学生が41人と減少している。アンケート2の設問Ⅲで①できると②気を付ければできるの回答が多かったというのは、鼻濁音の音は知っていても、その名前や使用手段を知らなかった、もしくは「音楽2」の授業を通じて鼻濁音を耳にするようになり、認識が上がり回答した学生が増えたからといえる。

設問Ⅰでは、鼻音化する語の問題例として問2のくが [nga] >、問3のくが [nga] >、

問6の<げ [nge]>、問7の<ぐ [ngu]>、問10の<ぎ [ngi]>の5句をアンケート1と同様に出题しているが、アンケート1とアンケート2の解答の結果を鼻濁音の認識度で比較すると、問2では35.4%であったのが58.5%に上昇し、問3では27%であったのが79%、問6では26.4%であったのが51%に、問7では25.8%であったものが53%に、問10では22.2%であったものが65%という具合に飛躍的に正解率が上がっている。しかし、鼻音化しない問題例として、問1の<が [ga]>について24%であったのが30.7%と上がり、問4の<ガ [ga]>の9.6%であったものが33%に、問5<ご [go]>22.2%であったものが49%に、問8<ガ [ga]>の21%であったものが59%に、問9<げ [ge]>の19.8%であったものが53%にという具合に、全ての問題で鼻濁音と解答する学生が増えた。ガ行に対して殆どの言葉に鼻濁音を使用といえる。このことは、学生たちが鼻音化する技術は習得しても、それを使うべきか使わざるべきかを判断することは、できていないということを指す。多くの学生が、ガ行の語彙に対し、鼻濁音を多用する解答をしている傾向にあるのは、鼻濁音を使用することでガ行の言葉が柔らかく感じ、感覚的に付けた方が美しく、また、そうあるべきという誤った認識が作用しているのかもしれない。日本語を抒情的に使おうとすればするほど、鼻濁音を多用したくなる所以といえる。問5の「じゅうごさい」の<ご>について、数字は一般的に鼻音化しない。しかし、「十五夜」は月の名称であり、鼻音化したほうが美しく月を表現できる。同じように「十五歳」という思春期の複雑な年頃をいう場合、人によっては鼻濁音を使って表現したい者もいるのかもしれないと考えられる。問8の「くもりガラス」にしても、外来語と捉えず、曇った様子を表現するには鼻濁音を使用する方を選ぶ、という者もいる可能性があるといえるわけで、鼻濁音を実際に使用するかは、個人の感性に委ねられることが多いといえる。

設問Ⅲでは、その使い方についての認識度を調べたが、アンケート2は、①できる、②気を付ければできると回答した学生が119人もおり、全体の74.8%が鼻音化することができることがわかった。③できないと回答した40人(25.2%)の学生を詳しく調べると、①以前より知っているが③できないという学生は3人で、この数字はアンケート1の設問Ⅱで①知っているが設問Ⅲで③できないと答えた9名の学生に含まれていた。残りの6名の学生は、「音楽2」の授業により鼻濁音の技術を習得したといえる。アンケート2の設問Ⅱで②名前を知っていたが設問Ⅲで③できないと答えた学生は16人であった。また、設問Ⅱで③知らなかった、設問Ⅲで③できないと回答している学生も18人おり、これらの学生への技術の習得に向けた何らかのサポートが必要であったかもしれない。

鼻濁音の認知は高まったとの回答がアンケート2の結果より読み取れるが、実際に学生たちが、どのような時にそれを意識して使用するかについて、アンケート2の設問Ⅳで調査した。その結果、殆どの学生が歌唱する際に気を付けていると答えていた。歌唱する際は、歌詞の意味とメロディーの関係から、息の量や声の音量、言葉の強さをコントロールする必要がある。日本の歌曲は、一音に1シラブル付くという特性から、一音ずつ一語ずつ歌唱する。会話をする場合と異なり、一語一語がゆっくりと表現される。その結果、歌う際に出てきたガ行に対し、鼻音化した方が美しいと判断した場合は、注意深く使用するといえる。しかし、「音楽2」では、歌唱する際に、音程や発声に気が取られ、また、弾き歌いの場合、伴奏の方に比重がいきまじ、歌詞にまで注意が払えないのが現実である。鼻音化した方が美しいといえる言葉に対して、うっかりと鼻音化せずに歌唱する学生が多い。その際、筆者が担当する授業の学生に対しては、その度に注意を払うように指導を行った。しかし、歌う時に気をつけるという学生の回答が9割強という理由は、歌唱の際に鼻濁音を使用すべき言葉に対して指導を受ける、とい

う繰り返しにより、学生自身も、特に注意を払うように意識することになったからと推察する。

5 結語

美しい日本語の表現として、第一に鼻濁音が使えるかということを挙げる人が多い。しかし、文部科学省指導要領の中で、「鼻濁音」に関する指導の項目は無い。実際に、鼻濁音を学習する機会が無いので、必要ないかと言えば、そうではないと考える。何故なら、鼻濁音とは、日本語の抒情性を表現する音として、無くてはならないものであると筆者は考えるからである。実際、助詞の「が」の発音の際に、テレビやラジオ、普段の会話から、鼻濁音を使わないで発音しているのを耳にする事が少なくない。本論では、本学保育学科の学生が、歌唱する際に、歌詞について高い意識を持って歌を歌う必要性を伝えたく、鼻濁音について、どのくらい周知しているかを足掛かりに調査した。そして「音楽2」の授業によって、どれくらい認識するようになったかを、把握することを目的とし、述べてきた。その結果、当初、鼻濁音について、その用途も含め殆どの学生が知らなかったことが分かったといえる。

「音楽2」の授業の結果、鼻濁音を使用する時は、歌唱をする時に、特に気を付けていると答えた学生が非常に多かった。このことは、「音楽2」で子どもの歌の正しい歌唱法について学んだ成果であり、学生たちは、美しい日本語で歌唱するための一つの方法である鼻濁音に対し、意識が高まったということがいえる。筆者の授業では、鼻音の遣り過ぎを注意するより、鼻音化しないで歌う箇所を、鼻音化するように指導することの方が多かったように思う。ある学生にとっては、鼻濁音の技法を習得することが難しいものであるかもしれない。普段から鼻濁音を使用していない学生は、鼻濁音を使用するには意識改革が必要であり、鼻濁音初心者にとっては、使用すべき鼻濁音の語に対し、鼻音を強調し過ぎるあまり、鼻音が鼻に付いてしまったり、鼻濁音の使用の選別が分からないために、ガ行の語彙の全てに用いてみたりする、ということが生じる。それは、本来の日本語の美しさから逸脱してしまうことでもあるが、鼻濁音を覚えてきたの時期は、その鼻に掛けることが強すぎて違和感があったとしても、その技術を習得できるまではある程度のトレーニングが必要と考え、指導では見守ることも必要であった。鼻濁音を意識して歌唱することの指導により、他の言葉に対する意識も芽生え、今回の鼻濁音にスポットをあてた研究は、学生の美しい日本語唱法の認識に一定の成果が出たといえる。残念であったことは、アンケート2の結果で、3人の学生が今でも鼻濁音についての認識が無いと回答したことである。しかし、これらの学生は、アンケート2の使用する時の注意状況で、朗読をする時や歌唱する際に気を付けていると答えている。その使用法について、プリント等の配布によって周知させなかったことは反省すべき点であり、今後は、学生全員が認識を持てるように、口頭だけの説明ではなく、配布物によっても指導を行っていかねばならないとの課題がわかった。また、現時点で、身体機能的に鼻音化ができない学生へのサポートをどのように指導して行くのかも含め、その指導法を研究していくことも今後の課題といえる。

鼻濁音を、地域や家庭で自然に身に付けるということを望めない環境である今日、「音楽2」の授業においてそれを教えるということは、非常に重要な責務と筆者は考える。何故なら、学生たちはやがて保育者となり、子どもたちに絵本の読み聞かせや歌を指導するのである。言葉に対して素地と言っても過言ではない子どもたちに、保育者が美しい日本語で歌唱をするならば、子どもたちは、旋律美から受ける感覚のみならず、日本語の抒情的な表現も感覚的に享受

するであろう。つまり、保育者となる学生たちは、美しい日本語で歌唱することにより、美しい日本語の伝承者という役目を担うわけである。このような保育者に指導を受けた子どもたちは、美しい日本語の継承者として、更に未来へ繋がっていく可能性を持つといえる。

鼻濁音だけが美しい日本語というわけではないが、美しい日本語表現の一つである鼻濁音について、学生が意識を持つことで、美しい日本語に興味を抱き、是非ともその伝承者として保育現場で活躍してほしいと願う。

【引用文献】

- ・¹⁾ 金田一春彦監修2014.『新明解日本語アクセント辞典 第2版CD付き』(第1刷発行 三省堂)のガ行鼻音(ガ・ギ・グ・ゲ・ゴ)についての解説pp.23

【脚注】

- ・²⁾ フランス語であり、擬声語、擬態語、擬音語を指す。
- ・³⁾ 愛知県、岐阜県、静岡県、福井県、石川県、富山県、長野県、山梨県、新潟県の9県。
- ・⁴⁾ 三重県、滋賀県、奈良県、和歌山県、京都府、大阪府、兵庫県の7県。

【参考文献】

- 国立国語研究所『日本語地図第1集』(- G - の音1 カガミ. 2. カゲ). (1966初版1981縮刷版)
厚生労働省編『保育所保育指針解説書』第5刷 フレーベル館. (2008)
文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館. (2008)
金田一春彦監修『新明解日本語アクセント辞典 第2版CD付き』第1刷発行 三省堂. (2014)
金田一春彦『日本語の特質』第34刷 NHK出版. (2009)
金田一春彦『日本語 新版(上)』第47刷 岩波新書. (2012)
大賀寛『美しい日本語を歌う』新第1版(通算第8刷) カワイ出版. (2014)
大賀寛『教科書に出ている 童謡・唱歌のふるさと 1・2年生のうた』第2刷 岩崎書店. (2007)
沖森卓也『はじめて読む日本語の歴史』第4刷 ベレ出版. (2014)
齋藤純男『日本語音声学入門 改訂版』改訂版第10刷 pp.87-89 三省堂. (2014)
佐藤亮一監修『お国ことばを知る 方言の地図帳 新版 方言の読本』第2刷 pp.319、pp.336-337、pp.350-351小学館. (2002)
中山録朗、飯田晴巳、陳力衛、木村義之、木村一『みんなの日本語辞典 言葉の疑問・不思議に答える』pp.146-149、pp.184-188 明治書院. (2009)
小林美実監修 井戸和秀『こどものうた100』第44刷 pp.94-95 チャイルド本社 (2010)